

【資料：解題】

## 『児玉三夫対談集 ～教育の源流を求めて～』（1987年）

対談テーマ：「大正デモクラシーと新教育」（昭和60年 ラジオたんぱ「新春対談」）

対談者：児玉三夫（明星大学学長）

鱈坂二夫（甲南女子大学学長・京都大学名誉教授）

### 近代思想の開花

児玉 明けましておめでとうございます。

鱈坂二夫 明けましておめでとうございます。

児玉 最近よく歴史をやる人たちがいらっしゃるように、デモクラシーの時代、大正デモクラシーの時代という、またこれは日本の歴史の中では非常に教育が盛んになったそういう時代と考えていいと思うんですが、それを、さらに深く考え、あるいはまた時には反省したりすることも沢山あるかと思いますが、鱈坂先生、ひとつ当時の時代的背景のようなことからお話を進めていただきまして、それからちょうどその時代に鱈坂先生は、薩摩でお過ごしになってから小学校の確かあれは附属小学校の五年の時でしたか、広島においでになって、高等師範の附属小学校でお過ごしになったと聞いているんですが、そういうようなことをきっかけとして、大正デモクラシーと教育についてお話を進めていただきたいと思います。

鱈坂 いまちょうど、国が臨調<sup>1</sup>を出発点として、今後の日本の教育をどうするかという、全く大変な時ですから、こういう時は大正期のあの教育というものを、ひとつの反省の材料にしてみることは大変いいことだと思います。

戦後のデモクラシーと大正デモクラシー、ちがいます<sup>2</sup>よ、これは。そのへんを考えると、あのころに本当に花咲いた教育の問題、その本質を考えたいと思うんですが……。

大正という時期は、明治の花が咲いた、その実が実った時期だと思うんです。たとえば哲学<sup>3</sup>ならば西田幾多郎<sup>\*i</sup>とか田辺元<sup>\*ii</sup>とか和辻哲郎<sup>\*iii</sup>とかいろいろいますが、やはり明治の末から大正にかけてこれが出ているんで、たとえば『善の研究』という西田先生の本が明治四十四年、『思索と体験』が大正四年、『自覚における直観と反省』が大正六年ですね、阿部次郎<sup>\*iv</sup>『三太郎の日記』が大正三年、朝永三十郎<sup>\*v</sup>『近世における私の自覚史』大正五年、田辺元『科学概論』大正七年、和辻哲郎『古寺巡礼』大正八年。

確かに大正という時期は思想的にも十分花が咲いて実が実ったという時期だと思うんです。明治という時期は、もうこれはまだ未熟児だった日本の国が成熟していったと、これは大変なことなんで、富国強兵、これでもってきたわけなんですけれどもね、教育勅語<sup>4</sup>というのがあって……。まあ確かにそういった未熟なものを成熟させるには効果があったと思いますが、日清、日露という戦争があってやがて明治の後半というのは、非常に伸びていったんだけど、そのへんを見ますというと、まあ誰でもいうことだが、国家主義でもって明治を引っばった。

たしかに国家主義もありますけれども、背後にはやはり強い自由主義、自由な気持ちというものが強かったと思うんです。たとえば、宗教<sup>5</sup>なら内村鑑三<sup>\*i</sup>というひとが無教会ということを説く、茶の本の岡倉天心<sup>\*ii</sup>が武士道じゃなくて、お茶の道こそ正しいんだというようなことをいう、与謝野晶子<sup>6</sup>がああいう歌を歌うというような具合にして、国家権力に対してやはり自由とか個人というものを言いだしたのが明治の後半だと思うんですね。

明治の末は文化的に非常に栄えて、そういう時にやっぱり教育もこう花が咲いているとみていいんじゃないかと思えますよ。

大正時代で一番大きな出来事は、これは第一次世界大戦だろうと思うんですが、私はちょうど小学校二年・三年という頃でしたがね、日本が連合国に加担して勝ったという。太平洋委任統治ということをかまされて、太平洋すべて日本だという、大変に盛んな好景気になったわけですが、またショックがあって、大変な不況になってくるという、日本の国家はうまく切り抜けたと思うんですね

たとえば<sup>7</sup>犬養毅<sup>\*i</sup>とか原敬<sup>\*ii</sup>とか高橋是清<sup>\*iii</sup>とか浜口雄幸<sup>\*iv</sup>というような人があって、あの財政的危機をみごとにのりきっている。これを私は日本の政治家は考えていいんじゃないかと。のりきるために金をセーブして、これを教育にまわしたというのが、あの頃の文部省ではないかと思うんですね。

護憲運動<sup>8</sup>といったか、これはあなたの方の専門ですが、思想だけでなく背後に政治も、広く国を想い、世界を想って、あそこで軍備を削減してまでもやっぱり財政を確かなものにしようという努力があったということ、あれは大きなことじゃないかなあ。

児玉 護憲運動についていえば、大正時代に日本の政治家というものが、ずいぶん私は立派な努力をしたんじゃないかと思っています。もちろんその途中ではいろいろな疑獄事件がおきたりですね、もちろんいいことづくめではないんですが、ただ何か政治を国民のものにして行こうという、そういう努力、特に明治から日本の国はやはり政治が特定の藩閥とか、あるいはまた特定の権力を持った人たちによって行われてきている、それを何とか一つ、国民が本当に政治に参加していきたいという、これにはいろいろと政治家が努力をされたことが残っているように思うのですが……。

その護憲運動も日本の国内だけでなく、やはり大正の始めにあった、第一次世界大戦も、考えてみるとデモクラシーの、政治の上で、勝利を取めたということの一つの例にもなるんじゃないかと思うんですね。

ドイツが権勢をふるっているいろいろな横暴なことをはじめた。それに対してデモクラシーの国といわれるような人たちが同盟して戦ったという、その結果がやはり世界的なデモクラシーの風潮をよんだということも、よく歴史でいわれていることですが、やはりそういう影響を日本の国民もうけたり、また政治家もうけたりして、明治以来の本当の国民による政治というものをまとめてきているんじゃないかと、こう思うんですが。

護憲運動ばかりじゃなくて、いろいろその間には世界大戦もございましたし、また昭和のあれは何年になりますかねえ、六・七年頃になるんじゃないですか、ロシアの革命が成功したという。

鱒坂 大正六年ですね。一九一七年ですから。

児玉 ああそうですね。そういうようなことでずいぶんそれ以後の若い人たちや政治家も中にはいますが、やはりそういうロシア革命<sup>9</sup>の影響を受けた人たちも相当出てきて、それからまた、大正デモクラシーの時代にいわゆる自由主義というか、そういう思想の他に、社会的ないろいろな思想が日本にも入ってきたりしておりますね。

私どもは、日本の教育のことを考える場合に、どうしても国内の、護憲運動もそうですけれども、国内だけのことでなく、外からの、つまり国の外からの影響とか、日本の国の、政治家だけでなく国民それぞれがどういうふうに対応していったかというような、従って教育の問題などはやはりそういう所から広い意味では考えられることなんじゃないかと思えますね。

## 自由主義思想の反映

鱒坂 そうです。例の西田哲学の西田先生思想なども、アメリカ<sup>10</sup>のジェームス<sup>\*i</sup>の影響をかなりうけたと、ご自分でそうおっしゃっておられます。

田中王堂<sup>\*ii</sup>が、今は民主主義といいますが、あの頃は民本主義といっておった、ジョン・デューイ<sup>\*iii</sup>などをちゃんと紹介している。ジョン・デューイは戦後の日本の教育に影響をもったといわれますが、もう既に前からあったも

のをね、それを十分自分のものにしえなかった所に、大正期の問題があったと思うんです。あの頃のデモクラシーというものは、本当に自由というものを十分に子どもたちに与え、民衆に与えるという気持ちでしょうね、それと護憲運動がうまく結びついたものだろうと思う。

ただ社会的な様々な力が出てきますから、思想界にも、たとえば社会主義、マルキシズムというものが入ってきて、そのほうの勢いがだんだん強くなる。これも事実ですよ。たまたま米騒動<sup>11</sup>というやつが大正八年にあって、私は小学校五年生でしたが、米屋が焼きうちにあった。おそろしいことだ、ということ高等師範の生徒さんが来て話してくれた。恐ろしいなあと思った。で、日本最初のメーデーが大正九年ですね。日本共産党結成が大正十一年という、あのへんから、社会主義的、マルキシズム的な力がだんだん出て来る。日本という国がだんだん暗さを増していくというのはそのへんだらうと思うが、あの前というものは非常に護憲運動にささえられた、自由をとり入れようという思想が出てきている。教育にまずこれが出て来ますよね。

ちょうど成城が大正六年、一九一七年、自由学園が大正十年、一九二一年、同じ二一年、大正十年に例の八大教育主張というのが出てきて、そういった自由な、個人を大事に考えようという、こういう考え方がでてきたということですね。

奈良の合科教育とか、ああいうものもそのころあった。八大教育主張<sup>12</sup>ですというと、これはもう本当に天下の人が驚いたくらいの華々しいものだったらしいが、手塚岸衛の自由教育論だとか、樋口長市の自学教育論だとか、河野清丸の自動教育論、稲毛詛風の創造教育論、千葉命吉、一切衝動皆満足論や、及川平治、動的教育論、片山伸、文芸教育論、小原國芳の全人教育論とね。この場合に非常に注意しなきゃいけないのは、稲毛詛風先生だけが早稲田の教授なんだ。あとは大学教授じゃないですよ。みんな実践家ですよ。大学教授がリーダーシップとったんじゃないしに実践家がこれをとったということが、私はやっぱり八大教育主張、特に大正デモクラシーの非常に意味のあるところじゃないかと思えますよね。

なつかしい名前<sup>13</sup>だが、木下竹次<sup>\*i</sup>、西村伊作<sup>\*ii</sup>、羽仁もと子<sup>\*iii</sup>、北沢種一<sup>\*iv</sup>、いろんな人があちこちでやっぱり本当に自分の自由な立場から学校をつくり、そこで実際に実験したということだと思えるんですけどねえ。文部省のほうもかなりこのころやっております。例えば、臨時教育会議だとか文政審議会というようなものを作ってね。

## 教育改革への始動

**鯨坂** 臨時教育会議<sup>14</sup>が大正六年から七年にかけて、文政審議会が大正十三年という頃。あそこでまた教育によって日本を興そうという新しい気持ちがお役所の方でもでてまいります。

**兄玉** 今おっしゃいましたね、大正六年から七年にかけて、臨時教育会議というのが日本の教育のほとんど全部にわたっての改革をね、やって行こうということで、開かれるわけですが、四十人ばかりの委員が中心で、非常に自由になんでも建議し意見を述べあってよろしいということで発足をしたようでございますね。

非常に広範にわたるのは、小学校の教育をはじめとして、これが最初の大正六年十月からでございますが、大正七年の十二月に至るまで、小学校教育、高等普通教育、大学専門教育、師範教育、私学制度、女子教育、実業教育、通俗教育、まあ今の社会教育ですか、学位制度に至るほとんど教育の全領域にわたっての改善案をここで検討いたしているようでございますね。

この結果日本では、ずいぶん教育の上でもいろいろな制度上また学校その他の進歩、拡張ということが行われたようでございますね。やはり大正の時期には日本の国の力が、相当大きくなっていったんじゃないかと。国民の力がですね、産業も非常に興るし、そういうことから、やはり教育というものを真剣に政治家は考えたんじゃないか、と思います。

学校で申しますと、義務教育は明治の終わり以後、六年の小学校というものがあるし、それに続く中等学校、こういう中等学校のこととか、さらに続く旧制の高等学校とか、専門学校、そしてやがて大学という……。

鯨坂 八つあった高等学校、名前を変えた高等学校ができて、あそこでバーっと増えたわけですよ。これは大変容易ならぬことですよ。

児玉 大正の終わりごろまでは、三十幾つの高等学校ができて、しかも私立がその中に相当沢山入ってきている。

鯨坂 そこに七年制を考えたということもね、一貫的にあのへんの前期中等教育と後期中等教育を結びつけて考える所に、私立の場合でも、国立でもあったわけですからね。これは非常に飛躍したおもしろい考え、実験だったと思うんですね。

児玉 今おっしゃいました七年制高等学校<sup>15</sup>というのは、確かにおもしろい考え方で、ただあの時は、何か国公立でやったのは、東京高校がひとつじゃないですか？

鯨坂 東京がひとつかな。

児玉 あとはほとんど私立でしょう。私立でいわゆる中学、高校一緒にした七年生高校というものをねえ。まあそういうことからさらに大学がね、ずいぶんできてくる。

鯨坂 帝国大学なんかですね。

児玉 ええ、帝国大学もそうだし、私立の大学もね、早稲田、慶應もこの時期に大学になってね、その他大正の終わりまでには続々とこの今の古い大学がどんどん顔を出して来て、いわゆる正式の「大学令<sup>16</sup>」による大学としての発展をして行くわけでございます。教育のいわば爆発の時代ですよ、一種のね。そういう時代を招来したと思うんですけどね。

## 沢柳政太郎の活躍

鯨坂 女子教育だけがまだ大学ではなくて専門学校でね。あれは沢柳先生<sup>17</sup>でしょう、東北大学で女子の入学を認めたというのは……。初めて認めた。そういうことを最初にやりなされた沢柳先生という人は非常に先の見えた、先というとちょっと悪いけれど、広く女の子にも大学、帝国大学へ入れたんだから、東大、京大入れぬ時にね、あれはやっぱりすぐれた人ですよ。

そのころ笑い話じゃないけれど、東北大学で男の学生がおこってね、女を入れたというんで総長の官舎に行ったもんらしい、けしからんと。そうしたら総長がお出になって、沢柳先生、ニッコリわらって「僕と君達とどっちが年が上かな」とおっしゃった。それで学生は帰っていったというようなことを、事実だったと後で先生から聞きましたけれどね。まあえらい人でしたね。いつも審議会の場合には沢柳先生お出になって、中心的な役割りをはたされた方ですよ。

児玉 沢柳先生は、京都大学の総長をされた時にね、大変苦勞されたという話を聞いておりますけれども、教育界の本当に立派な思想を持ち、行政手腕もある、ああいう先生が本当に京都大学総長時代にはご苦勞されたということですね。

鯨坂 あの方は大変な学者ですよ。お書きになった『実際的教育学』というのは、今でも立派に通用しますよ。学者であって行政官でしかも文部次官まで行かれて、若くして東北大学総長、四十代で京都大学総長、これはたいした存在です。退官されて創ったのが大正六年の成城小学校です。

児玉 そうだそうですね。

鯨坂 こういう人はまずめずらしいですよ。

児玉 そうですね。その前後にもずいぶん外国をね、視察におまわりになって、また国際会議にもずいぶん出てお

いになるようですね。ヨーロッパからやはりアメリカにかけて、そういう時にやはりこの日本の教育のことをいつも考えては、外国の特色ある参考になる進んだ教育の考え方をね、ご自分でもずいぶんやってみたいというような、お考えがあったんじゃないかと思いますが。あの成城学園が成城小学校から始まったのは、東京の牛込だったですよ。

**鱒坂** そう大正六年にね、沢柳先生が若くして東北大学総長、次いで京都大学総長をやられて退官されて、大正六年に最初にやんなさった仕事が、成城小学校を創ったという……これはたいしたことだと思いますよ。文部次官であり帝国教育会長であり、文学博士、大学総長という者が、今度は小学校をはじめた。あの人は、ですから大変な人だと思いますね。牛込にそのころ成城中学校っていうのがあった。これは、確か日清戦争に勝ってこっちが金をもらった、それをむしろ清国の青年達をよんで教育するための金に使ったというふうに聞いていますがね。で成城中学校を創った、だから中国からかなり来ています。

ここを出た人が皆士官学校へ行く。士官学校の予備校みたいなもんですわ。士官学校だけじゃないけれども多くの者が行った。その校長を沢柳先生が兼ねられていたわけね。そこに小学校を創って、兵舎跡のね、本当に大変なところでしたよね。

天下に対していよいよやるぞっていう広告を出すんですがね、これもまた盛んなもんだな。「我が国の小学校が明治維新後、半世紀に成した進歩は実に嘆賞に値いしますが、同時にまたこの五十年の歳月によって今や因襲固定の殻ができ、教育者は煩瑣な形式にとらわれかけました。外観の完備に近いほどの進歩のうちには、ややもすれば教育の根本精神をわすれて形式化せんとする弊害をかもしつつあるように思われます。我が国の教育界には今やいわゆる、ものきわまって変じ、変じて通ずべき時節が到来したのではありますまいか。さればこそこのかたまりかけた形式の殻をうちくだいて教育の生き生きした精神から児童を教育すべきときであろうと思います。」

中曽根さん、これを見ておるかどうかしらんが、みななければいけないと思いますよ。教育臨調もね。「ことに現に行われつつある欧州大戦は、我が国の教育界にむかってもひしひしと一覚醒をうながしています。我が成城小学校はこの機運に乗じ、この要望に応じ、微力をも顧みずここに教育上の新しい努力を試みんがために生まれんとするのであります。」と。欧州大戦がこうだぞ、と、国はこうだぞ、と、こうせにやいかんじゃないかということをし、東京の新聞に出している。そして全国に先生を求めたわけですね。血判もしていったというんですよ。

その理想というのを四つあげてあります。第一が個性尊重の教育。能率高き教育という副題がついている。二が自然と親しむ教育、剛健不撓の教育。三が心情の教育、鑑賞の教育、四は科学的研究を基とする教育と、こういうことではじめています。新聞に広告をだして、先生を募集して、そしてこれをやるんだと、大声明ですね。こんなことは今まで日本の教育史上なかったことでしょう、一小学校がね。

そして非常にめずらしいことに、修身を四年生からやっています。これは沢柳先生の持論ですよ。一年から三年までは、まだ本じゃなくて生活の中に、各教科の中に道徳教育をやろう、時間をもうけてやるのは四年生からだ。それから数学は二年からはじめた。算術というのは数学といいました。このへんも大変意味がある。二年生からやれと。そして自然科、理科を自然科と称して、これを一年生からやっている。歴史、地理は四年からはじめようと。子どもの成長発達ということと、学科をいつからどう教えるかということと、非常に考えられた。これはやっぱり学習心理に基づいたものだと思いますね、これは。

書き方、昔は毛筆で書いたんですね。これはやめて鉛筆でかけと、硬筆でやれと、二年から行なうといったような、こういった非常に具体的な改革をやらせてですよ、そして天下に号令してやったわけなんだが、私が入ったのは中学校四年生、やがて高等学校。あなたは小学校へ入ったんだから小学校の実際はあなたの方が知っている。これは華々しいもんですよ、成城小学校というものはね。

## 成城小学校のころ

児玉 私が成城小学校にお世話になったのは、ちょうど小学校の三年の三学期でした。まだ東京は大震災のあとのいろいろなことがかたづかないで、本当にひどい状態でしたが、成城小学校の三年の三学期に入りました時ね、その小学校に行きましたら、たいへんな建物なんですね。これが、もう本当に人が住む所かと思うようなね。

鱒坂 兵舎のあとですからねえ。

児玉 ええ。とにかく大きいことは大きいんだけど、ボロ校舎でねえ。あっちがこわれそうだし、こっちが危ないというようなね、とにかくひどい所に。まあ建物は大きかったんですけども、二階屋でしてね、私どもの部屋は二階でございましたかね、その三年の部屋に行きましたら、私今でも忘れないんですが、私の隣りにすわったのが<sup>18</sup>、斉藤光<sup>\*i</sup>君なんです。ご承知のように、英文学の大先生と東大でいわれた、あの斉藤<sup>\*ii</sup>先生の長男でね、光君が私の右隣です。鱒坂先生、あのころアメリカの見学に見童や生徒をつれて行かれた、鱒坂先生もおいでになられたことがございますね。

鱒坂 ええ、いきました。

児玉 あの時の小学校から行った西尾君、西尾君というのが私の反対側にいましてね、そして、その中にはいろいろな思い出の深い友達がたくさんいるんですが、とにかく、竹組っていったかな、あそこの学校はね、一年のうちに二回見童を入れる。

鱒坂 そうそう、春と秋とね。

児玉 そうなんです。四月から入る子と、それから九月から入る子とね、そういうふうに別れておましてね、私はその九月から入れられて、はじめて行きました。おどろいたことは、とにかく皆元気のいいことですね。

鱒坂 そう、いつも元気がよかったです。

児玉 休み時間になると運動場に出てあの時分はやったのは、サッカーと、海戦遊戯というのがやったなあ。海戦遊戯というのは帽子をとりっこするんですけどもね、本当にすぐ友達にしてくれましてね、さあこいつ、てなわけで、一緒にかいまわったような覚えがあります。

担任の先生は沼崎先生という方で、この方はもうなくなっておられますが、大変思い出に残る先生は何人かおります。その中にちょうど私どもずっと、小学校、中学校にかけてお世話になりましたね、落合盛吉先生という方がおいでになりました。

この方は、沢柳先生のまだお元気な時分に、主事として広島高等師範からむかえられた小原國芳<sup>19</sup>先生という方がおいでになる、この小原國芳先生の関係で、落合先生が成城小学校の教諭になられたという話ですね。

鱒坂 ああそう。鹿児島師範学校の後輩になるんですよ。

児玉 落合先生には後にもいろいろとお世話になっておりますが、落合先生は、牛込校舎で理科をご指導になっておられました。それから牛込の学校が仮家でしかも非常に古くて、危ないというようなこともあったりして、沢柳先生や小原國芳先生などが、新開拓をしていかなきゃいけないということで、昔の東京の郊外の砧の、今の世田谷の成城にキャンパスを求められたんだろうと思うんです。

それから、小学校に続く中学校もできておりました。私立学校とは、父兄が本当に理想的な教育だということで、それを慕って来るわけでございますが、やはりその次に考えることは、次の学校のことなんです。小学校が終了したら今度は中学校はどうなるんだろうか、ということで。小学校だけでなく中学校、さらにはもっともっとという考えがご父兄のなかにはあったんじゃないかと思います。

## 父兄も参画した理想学校づくり

児玉 先生方も、私立学校というのは創設の精神を具体化する先生がおいでになる。その下に、その精神を慕って自分もそういう経験をしてみたいという方が集まってくる。そういうことで私立学校というのはやはり、同志のやっている学校だと思う。同じ精神のもとに、同じ身を呈してそれを経験してみたい、そういうようないわゆる同士がですね、集まってやっている学校だと、私立学校はそういうふう思うんです。

成城もそういう同志の間でいろいろなことが検討され、そしてまた、当時の校長であられた沢柳先生もひとつそれじゃあとということで世田谷の今の成城の地にですね、昔の東京の郊外の砧村へお移りになったのではないかと思います。

鯨坂 あのころはまだ、小田急がないころで、私どもは京王線の烏山から一年間歩いたですよ。あの土地を坪三円で買ったそうですよ。何万坪かを、坪三円で買って、それを親達が坪十円で買って、七円だけ学校に寄付してできたのが成城学園なんです。こういうことはしりませんよ、今の人は。

大変だった、全員無一文からやったんだから。たとえば武蔵、成蹊というような所は、金持ちが金出してくれて、それで創った。成城は、親が三円の土地を十円で買ってくぎ一本板一枚を持って来て創った学校です。あのころは、小田急も通らない武蔵野の原っぱでしたがね、本当に自然の中に、女性の<sup>20</sup>平塚雷鳥<sup>\*i</sup>さん、小説家加藤武雄<sup>\*ii</sup>、中河與一<sup>\*iii</sup>、というような人が、あちこちにいなさって、柳田国男先生もおられた。私どもよく遊びに行ったものですがね。北原白秋、皆あのへんに住んでおられたです。それは本当に今とは全くちがった成城でしたけれどもね。

その中に学園ができて、幼稚園、小学校、中学校、高等学校といった。幼稚園は小林宗作<sup>21</sup>先生、『窓ぎわのトットちゃん』に出てくる、あの小林先生が最初あそこで幼稚園をやられてた。何も教えずに子どもを連れてブラブラ捕虫網持っただけでね、帰ってきたらリトミックをやっているという、私あれが幼児教育の典型だろうと思うけれど、今みたいにコセコセしないですよ。

こうやって自然に親しむ教育。子どもは自分でやる、いわゆる自学自習の教育。こういうことは皆やったでしょう。しかし、やることは少なくとも科学的なんですよ。背景にね、心理学がとり入れられ、いろいろな事でもってやっているという、そういうことをやったわけでしょうね。成城がよかったのは、たしかに子どもの自由を子どもに与えて、子どもの生きる力をできる限りのばしてやる、できる限りおのおの個性があるから、その個性をそのままのばしてやる。だから学習の時間に自由を与えていわゆるドルトン・プラン<sup>22</sup>ができたわけです。

## 新教育実践の先駆け

鯨坂 ほっといちゃいかんから、時間は自由に与えるが、このテキストによってやれ、というわけで指導書ができたわけですね、自学自習の。それは担任の先生が書くっていうんだから。この手引きがあつて、我われは自由にやれた。しかもそれは、道徳論を含みながらね。これは本当にすばらしい教育ですよ。

児玉 成城学園の、小学校は今先生がおっしゃいましたドルトン・プランの、そのままをうけ入れたわけじゃないと思うんです。やはり成城小学校として、一つのプリンシプルがあつて、それにどういうふうはこのドルトン・プランを採用したら、とり入れたならば、プラスになるか、ということをごだいぶ検討されたようですね。そういうものを一つやってみようということでごださったことだと思うんですけれどもね。

鯨坂 一斉の授業が音楽、体育でしょう。昔の修身、これは一斉ね。あとは皆自由にそれぞれの計画に従って時間割がないんだから、自分が時間割をつくるんだから。

児玉 そうなんですよ。砧にうつったのが四年からですがね、毎学期、時間割りを、ちょうど、画用紙の半分位で

すかね、印刷してあった時間割りに、自分で、何曜日の何時間目、次の何時間目、全部国語の時間、数学の時間、理科の時間とか、自分で書きこむんですね。

鯨坂 自分で。その時間に研究室へ行って何人かと一緒にやる。

児玉 そうなんです。下の方に、自分の持つ進度表、これは先生が書いてくれるんですが、時間割は自分で。そしてその時間の時に、月曜日の何時間目は理科だっていうと、理科の特別教室へ行くんです。

ほとんどが特別教室。国語の特別教室、理科の特別教室、数学の教室というようにね。普通教室も若干ありましたけれどもほとんどがそういう特別教室で、そこにいきますと、国語は詳解漢和とか広辞苑とか、何十冊もそろっている。また日本文学全集とか、世界文学全集がそろっていて、国語の勉強をするには、そこで一応何でも参考書がそろっている。

島崎藤村とか、芥川龍之介の本とかずいぶんありましたよ。それから、理科の部屋へ行きますと、やはりあのころの成城というのは、いろいろな教材、模型ね、そういうものの中に、自然の観察をしたりするために、ドイツの最高級の顕微鏡を、二千倍、三千倍という顕微鏡を、十も二十も箱に入っている。大きな、木の葉っぱをみるとときには、百五十倍とか二百倍とかのをそれもよくみるとツァイスの印が入っている、偉かったと思いますね。

あの時の成城は、あまりお金は豊かじゃなかったけれども、教材や研究の道具は最高のものを使った。今でも忘れないのは音楽でね、どういう教科書を先生方から世話していただいたかという、コーリューブング。コーリューブングはドイツのやつを、それからホームソング。イギリスのホームソング。これは、一番いいものをとり入れたという。これはやはりあの時分の先生方の考え方が、本当にちがっていたなと思いますね。

児玉 おそらく音楽学校以外には、コーリューブングを使った学校は、成城くらいのもんじゃないでしょうか。

児玉 おそらくそうじゃないかと思いますね。

鯨坂 そうですよ。先生もよかった。梁田<sup>23</sup>先生。篠野先生。

児玉 思い出に残る先生ですね。杉生先生も。

鯨坂 絵は正宗得三郎<sup>24</sup>先生、ほんとうに一流をつれてきなすった。これは偉かったと思う。それで、思い出すんだけど、売店の田上のおばさん、あの方は与謝野鉄幹のおばさんで、つまりそういうおばさんを売店のおばさんにして、一番よく子どもがふれる、これは無駄だから買うな、とか何だとか注意しながらやってくれる。あれは、ああいう所にいい人をもってきたというのは、偉いことです。

児玉 ちょっと今じゃできないです。むだ使いしちゃだめよ、とか、そういう風に食べ残しちゃだめよというふうには、そういう話は、先生のかわりですよ。

鯨坂 なつかしい話が出たが、まあ成城もだしあちこちに新学校ができてね、高等学校なら武蔵とか、成蹊とかね、やんなさった。成蹊は、ほとんど成城と同じころにはじまって、あれも小学校からでしょ。それからやがて明星というようなものがだんだんでくる。そういうことですよ。ですから日本中がそういうような新しい教育運動でぐんぐんやっけて行くというような脈々とした流れがあったなあ、大正のころは……。

児玉 特にあの児童劇とか、あるいは児童絵画とかね、ずいぶん文学、芸術方面にも発展してゆくわけなんです、あの時分に斎田喬<sup>25</sup>先生、児童文学賞だったかな戦後授与されてね。

鯨坂 演劇の先生だったかな。

児玉 あの先生のお宅へはずいぶんいったもんですよ。日曜日あたりには絵を教わりに。油絵が上手でね。来なさいってわけで、よく遊びにいったんですがね。あるいはまた演劇の指導など。先生自らこういう風にやるんだってね、手本をなさりながらね。

鯨坂 すずめのおやどなんか、あんた方だったかな。

児玉 そうなんです。本当になつかしいですね。まあ、成城小学校のことは、直接経験したことだもんですから、



少し熱が入ってしまいました。

**鯨坂** 自由を与えて真実をのばして行けという、そういうことは成城のよいところだったと思います。

**兄玉** 今の教育で一番大事なことだと私は思うんですね。

**鯨坂** 血の通う教育とはそんなもんですね。

**兄玉** ええ、本当にそう思いますね。本当にそういう意味で成城のあの当時の教育は、本当に鯨坂先生おっしゃったような血の通った教育だったと思います。

**鯨坂** そうそう。

**兄玉** 本当にいろいろとお教えといただいて、ありがとうございました。

**鯨坂** どうも、楽しいひと時でした。

昭和 60 年 ラジオたんぱ「新春対談」

【解題】

『児玉三夫対談集 ～教育の源流を求めて～』（1987年）  
対談テーマ：「大正デモクラシーと新教育」（昭和60年 ラジオたんぱ「新春対談」）

鯨井俊彦\*

はじめに

児玉三夫先生と鯨坂二夫先生による対談「大正デモクラシーと新教育」（昭和60年ラジオたんぱ「新春対談」）の解題を次の要領で進めたい。

対談は以下のような内容になっている。この「小見出し」に従って（脚注）をつけ、その脚注の中で解題もしていきたい。

- （小見出し）①近代思想の開花・・・・・・・・・・（注）1～9.  
②自由主義思想の反映・・・・・・・・・・（注）10～13.  
③教育改革への始動・・・・・・・・・・（注）14～16.  
④沢柳政太郎の活躍・・・・・・・・・・（注）17.  
⑤成城小学校のころ・・・・・・・・・・（注）18～19.  
⑥父兄も参画した理想学校づくり・・・・・・・・（注）20～22.  
⑦新教育実践の先駆け・・・・・・・・・・（注）23～25.

（脚注）

① 近代思想の開花

1・国の「臨調」（正式には「臨時教育審議会」、略して臨調・臨教審などとよぶ）

1984（昭和59）年2月6日、中曽根康弘元首相は第101国会における施政方針演説で、内閣総理大臣の諮問に応じて教育改革について調査審議する機関を3年間設けることを示し、3月27日臨時教育審議会法案が国会に提出された。設置の背景には、戦後40年を経てわが国の教育は高く評価される反面、記憶力中心で、自ら考え判断する能力の伸長が妨げられ、個性の乏しいうらみがあること、日本人としての自覚に欠ける面があること、大学における教育・研究水準は国際的に評価される面が多くないこと、研究者の交流や外国語教育などの面で国際化への対応が遅れていること、制度や運用の画一性や硬直性による弊害が目立つことなどの指摘があった。4回の答申があったが、そのうち、2次、3次答申を要約したのが4次答申であった。主要内容としては次のようである。基本発想部分では、明治の近代学校制度の導入と戦後の教育改革は国家社会体制の変革を伴うものであったのに対して、今次改革は平時の改革という相違があるが、「追いつき型近代化」の時代を終えて、過去に未経験の国際化、情報化、成熟化の時代に向かうという文明的な転換期にさしかかっている現時点での改革という大きな意義を持っているとする。そして教育改革の基本視点を個性尊重の原則の確立、生涯学習体系への移行、国際社会への貢献や情報社会への対応など、変化への

\* 明星大学名誉教授

対応におくとした。

たとえば「改革のための具体方策」を3つ挙げている。①高等教育では、入学者選抜に際して国公立を通して各大学が自由に利用できるテストの創設、文部大臣に勧告権をもつ大学審議会の創設、社会との連携の強化（いわゆる産学協同）、高等教育に対する公財政支出の充実など。②初等中等教育関係では新任教員の1年間の初任者研修の導入、教員免許制度の柔軟化、6年制中等学校の創設、単位制高校の設置、道徳の充実、小学校低学年における教科の総合化など、③国際化への対応のための改革では、英語教育の見直しなどである。

## 2・戦後のデモクラシーと大正デモクラシーとの違い・その本質

ここでは最初に、大正デモクラシーの特徴・本質を大正新教育成立過程との関連でふれたい。その後で、戦後のデモクラシーとの違いを簡単に述べてみたい。

わが国の近代教育制度は明治維新以後に欧米に発展していた近代教育制度を参照し、明治5年8月に「学制」を發布した。これは日本の文教史上真に時期を画したことで、全国民を入学させる学校制度がこの時をもって発足した。その後、明治12年の教育令、翌13年の改正教育令が、学制を廃止して公にされた新しい教育制度の法令であった。そして明治26年頃から当時の事情に適合するよう教育制度を改める方策が立てられ、それが日清戦争後にかけての教育制度の改革となった。明治40年代に入ってから、日露戦争後の国力発展に応ずる教育の体系を整えようとして、先ず初等教育の義務修学年限を引き上げる方針を決定した。明治40年に尋常小学校4ヵ年の制度を改め6ヵ年とし、義務教育年限を6年とした。また、明治40年代に入ってから教育改善の問題として、国民道徳をいかにして振興し、国民の思想を統一するかが取り上げられそのための方策がたてられた。このようにして大正時代に入ったが、間もなく第一次世界戦争になった。そして、第一次世界戦争後の民主思想がわが国においても現れて、学校教育機会均等の考え方を主張するようになった。これを学校の教育に対しても求めるような情勢となってきた。特に学校教育の分野においては新教育運動が起こり、これが生徒の自由な活動を尊重し、個性に適合した教育を施すべきことを主張した。こうして従来の授業法を改革する運動も起こり、新しい教育の実践を学校において試みるものも少なくなかった。このような事情の後を受けて第一次世界戦争後の情勢に応じて学制の改革の答申を行うために臨時教育会議の構成が成されることになったのである。

ここに「教育デモクラシーの潮流」が花開く路線が敷かれ、「新教育」理論や「新学校の実践」が試みられる背景となったのである。

戦後のデモクラシーとしては、昭和20年の敗戦によって新しい日本がスタート。民主社会、民主教育を建設する国民の養成を国是とする「新憲法」「教育基本法」などに沿っての戦後の民主主義教育が始まることになった。教育基本法の第1条には、教育とは「人格の完成」をその根本原理として行われる旨が定められ、現在まで行われてきている。

## 3・西田幾多郎\* i ・田辺元\* ii ・和辻哲郎\* iii ・阿部次郎\* iv ・朝永三十郎\* v

\* i 西田幾多郎（にしだ・きたろう 1890〔明治23〕－1945〔昭和20〕）

哲学者。石川県出身。東京帝国大学卒。日常経験としての純粹経験と座禪の体験とを融合して、主観・客観が分離する以前の原初的な純粹経験という独自の立場を創造し、その主体を人格とした。晩年、日本的な「無」の哲学を主張。京都帝国大学教授。文化勲章受賞。『善の研究』『自覚における直観と反省』『無の自覚的限定』などがある。

\* ii 田辺元（たなべ・はじめ 1885〔明治18〕－1962〔昭和7〕）

哲学者。東京出身。東京帝国大学卒。いわゆる京都学派の絶対弁証法の哲学者。京大教授などを歴任。文化勲

章受賞。『科学概論』、『カントの目的論』、『ヘーゲル哲学と弁証法』、『懺悔道としての哲学』などがある。

\*iii 和辻哲郎（わつじ・てつろう 1889〔明治22〕－1960〔昭和35〕）

哲学者、評論家。兵庫県出身。東大教授。漱石に師事。ニーチェ、キルケゴール、また、仏教美術、日本思想史の研究家。西洋哲学を日本の精神的考察のなかで止揚し、独自の哲学体系としての倫理学を定立した。文化勲章受賞。『ニーチェ研究』、『倫理学』、『風土』、『古寺巡礼』などがある。

\*iv 阿部次郎（あべ・じろう 1883〔明治16〕－1959〔昭和34〕）

哲学者、評論家。山形県出身。夏目漱石の門下。人格主義、理想主義的評論で知られる。東北帝国大学教授。『三太郎の日記』、『倫理学の根本問題』、『人格主義』などがある。

\*v 朝永三十郎（ともなが・さんじゅうろう 1871〔明治4〕－1951〔昭和26〕）

哲学者。長崎県出身。京都帝国大学教授。西洋近世哲学史を研究、哲学思想の啓蒙につとめた。『近世に於ける「我」の自覚史』、『デカルト』などがある。

#### 4・教育勅語

日本帝国の教育の基本理念を示した「教育に関する勅語」をいう。1890（明治23）年に発布せられ、古来天皇は徳をもって統治してきたことを述べ、国民の守るべき徳目を掲げ、「一旦緩急あるときは義勇公に奉ずる」のが本分であることを強調した。第二次世界大戦前の国民教育に指針を与え続けてきたが、1948（昭和23）年に国会決議にて失効を確認。

#### 5・内村鑑三\* i・岡倉天心\* ii

\* i 内村鑑三（うちむら・かんぞう 1861〔万延2〕－1930〔昭和5〕）

宗教学家・評論家。高崎の人。札幌農学校（現 北海道大学）出身。アメリカのアメスト大学に留学。明治21年に帰国。東洋英和学校、第一高等学校の教師などを勤める。明治33年『聖書之研究』を刊行。明治36年日露戦争に非戦論を唱える。無教会主義といわれる独自のキリスト教のあり方を創唱した伝道者として教会的キリスト教に対して無教会主義を唱えた。数多くの著作・評論・講演活動を通じて日本の文学や思想に大きな影響を与えた。『日本及日本人』（明27）、『余は如何にして基督教徒となりし乎』（明28）、『後世への最大遺物』（明30）などがある。

\* ii 岡倉天心（おかくら・てんしん 1862〔文久2〕－1913〔大正2〕）

明治時代、美術界の指導者。本名は覚三。天心は幼少時に父母のもとを離れ、神奈川通海見山長延寺に預けられて、そこで漢学を学ぶ。八歳の頃から高島英語学校及びジェームズ・バラの英語塾で英語を習い始めた。明治10年、天心は16歳で、新設の東京大学文学部に入学、翌年、アーネスト・フェノロサ（1853-1908）が着任。このフェノロサとの出会いによって、わが国の古美術はその千年余のヴェールを脱がされていくことになった。東京美術学校が1889（明治22）年に国立学校として開設。翌1890年、天心は校長となり、「日本美術史」を講ずる。その後、1898（明治31）年私立学校日本美術院を開設し、横山大観、下村観山、菱田春草らとともに活躍する。天心が生前に単行本として出版した著作は『東洋の理想』（1902年）、『日本の目覚め』（1904年）『茶の本』（1906年）の三冊だけで、すべて英文で執筆され、外国で出版されている。

#### 6・与謝野晶子（よさの・あきこ 1878〔明治11〕－1942〔昭和17〕）

明治～昭和期の歌人、詩人。「明星」を代表する歌人として活躍。日露戦争に参加した弟の無事を祈った詩編「君死にたもふこと勿れ」（「明星」明治37年刊）はすぐれた反戦詩として有名。一方、婦人問題、教育問題を中心に評

論活動を活発に展開した。大正8(1919)年には平塚らいてう、山川菊栄らと母性保護論争を展開、女性の経済的自立を訴え母性保護を国家に要求するのは依頼主義であると主張した。教育問題では自由主義教育を唱え、大正10年文化学院創設に参加、学監となり昭和16年までつとめた。

#### 7・犬養毅\* i ・原敬\* ii ・高橋是清\* iii ・浜口雄幸\* iv

\* i 犬養毅 (いぬかい・つよし 1855〔安政2〕 - 1932〔昭和7〕)

政治家。備中庭瀬藩士の子。号は木堂。慶応義塾に学ぶ。立憲改進黨結成に参加。明治23(1890)年以來第1回選挙から衆議院議員連続当選17回。国民党、さらに革新倶楽部を結成、のち政友会総裁。その間、文相、逓相を歴任。昭和6(1931)年首相となったが、翌年五・十五事件で暗殺された。第1次護憲運動で活躍。

\* ii 原敬 (はら・たかし 1856〔安政3〕 - 1921〔大正10〕)

政治家。岩手県出身。新聞記者から官僚となり、伊藤博文に信任される。第四次伊藤内閣の逓相、第一次・第二次西園寺内閣、第一次山本内閣の内相を歴任、1914(大正3)年立憲政友会総裁となり、同7年寺内内閣の後、平民宰相として初めて政党内閣を組織。東京駅頭で暗殺された。

\* iii 高橋是清 (たかはし・これきよ 1854〔嘉永7〕 - 1936〔昭和11〕)

政治家。財政家。仙台藩士高橋是忠の養子。米国学後森有礼の書生となる。開成学校卒業。文部省、農商務省、日本銀行に勤め、1911(明治44)年日銀総裁、また蔵相、政友会総裁、首相などの要職を歴任。1936(昭和11)年の二・二六事件で暗殺された。

\* iv 浜口雄幸 (はまぐち・おさち 1870〔明治3〕 - 1931〔昭和6〕)

政治家。高知県出身。第一、二次加藤内閣の蔵相、第一次若槻内閣の内相を経て、立憲民政党総裁。1929(昭和4)年首相就任。産業合理化・国際協調外交を唱え、ロンドン海軍軍縮条約を結ぶ。右翼青年に狙撃されたのがもとで没。

#### 8・護憲運動

憲政擁護運動の略称。藩閥による官僚政治に反対し、立憲政治の確立を目的とする政治運動。(1)第一次。1912(大正元)年12月、政党・新聞記者らが提唱して憲政擁護の国民大会を開催。翌年2月10日、議会の停止に怒った数万の民衆と警察が衝突し、第三次桂内閣を総辞職させた。大正政変という。(2)第二次。1924(大正13)年、憲政会・政友会・革新倶楽部の三派が合同して運動を展開。普選断行、貴族院改革、行財政整理を国民に訴えて総選挙に大勝利、護憲三派内閣を樹立した。

#### 9・ロシア革命

1917年3月(露暦2月)、ロマノフ家を倒し、同年11月(露暦10月)、ソビエト政権を成立させたロシアの革命。広くは1905年の革命を第一次革命とし、1917年の革命を第二次革命とする。第一次革命は、1905年1月の血の日曜日事件を端緒に、6月の黒海艦隊の反乱で最高潮に達したが、日露戦争の中止、国会(ドゥーマ)開設の勅令発布で収拾され、12月のモスクワの武装蜂起失敗で退潮に向かい、翌年の国会開設、ストルイピンの反動時代となる。第二次革命は、第1次世界大戦の敗北と社会不安により、1917年3月、ブルジョア勢力を主体とする帝政が打倒されてケレンスキーの臨時政府が成立する(二月革命)。さらに11月(露暦10月)レーニンの指揮の下ボルシェビキが蜂起してケレンスキー政権を倒し、ソビエト政権が成立して世界最初の社会主義革命が成り(10月革命)ドイツと講和を結んだ。

## ② 自由主義思想の反映

### 10・ジェームス\* i / 田中王堂\* ii / ジョン・デューイ\* iii

プラグマティズムはギリシャ語 pragma の複数形 pragmata に ism を加えてつくられた語で、プラグマ（事物・出来事・行為・活動・実行・実務）の立場に立つ思想である。プラグマティズムとは、パースが1878年に「いかにしてわれわれの観念を明らかにするか」という論文で「プラグマティズムの確率」を表明したことに始まった。そして、日本へは20世紀の初頭（明治40年代）に紹介されたが、実用主義、実際主義と訳され、プラグマティズムの功利的な一面のみが印象づけられた。その後、この点を是正する意味もあってプラグマティズムとして訳さないままで用いられている。ジェームス\* i（William James, 1842-1910, アメリカの哲学者・心理学者。パースとともにプラグマティズムの提唱者。）の連続講演は、『プラグマティズム』 Pragmatism [1907年]として公刊されて、広く普及する端緒を得た。ジェームスは、当時ヨーロッパで行われていた生の哲学とも関連する幅広い視野で物事をとらえ、心理学者でもあったことから（名著『心理学原理』 Principles of Psychology, 2vols., 1890. がある）、意識の根本事実は意識の流れという直接経験であるとして、具体的に人間の経験をとらえようとした。

田中王堂\* ii（たなか・おうどう 1867-1932 哲学者。早大教授。）は米国に留学、プラグマティズム哲学を導入、その紹介・翻訳に努め、『書齋より街頭に』『哲人主義』などの著書でプラグマティズムの精神を鼓吹した。

デューイ\* iii（John Dewey, 1859-1952, アメリカの哲学者、教育哲学者。主著『民主主義と教育』（1916年）、『確実性の探究』（1934年）他）はプラグマティズムをさらに展開して、道具主義（instrumentalism）と称される一層幅広い立場を樹立した。あらゆる概念・理論は次の発展段階のための道具であると主張し教育もその立場で考えた。プラグマティズムの哲学的思想は、とりわけデューイによって、教育という実践の場面へと適用された。教育を行為 doing のことととらえ、環境・社会と児童の間の相互作用によって創造的な人格を形成することを目指す。教育方法・教育課程・問題解決学習、教材中心から生活中心カリキュラムへなど、教育の観念と実践を大きく変えることになった。

### 11・米騒動

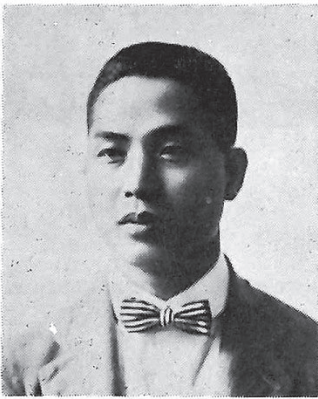
1917（大正6）年から18年にかけて日本では、米価が高騰した。これは第一次世界大戦中のインフラの一環であるとともに、資本主義の急速な発展により都市人口が急増し、米の需要が増大したにもかかわらず既成地主制下の米の生産が停滞して供給不足に陥ったことが根本的原因であり、さらに地主、米商人が投機を計って売り惜しみ、買占めをしたこと、寺内正毅内閣が、地主、商人の利益のため外米輸入撤廃の措置をとらなかったこと、シベリア出兵の決定によりいっそう買占めが行われたこと、などの事情が加わった結果だった。7月以降米価は以上に高騰し、民衆の生活難と生活不安が深まり、ついに空前の大暴動が引き起こされた。騒動はおよそ四期に区分される。

第四期にあたる騒動は約50日間に及び、青森、岩手、秋田、栃木、沖縄の5県を除く一道三府三十八県の368ヶ所に大小の暴動、示威が発生した。政府は軍隊を出動させ騒動を鎮圧した。しかし米騒動の衝撃を受けて寺内内閣は退陣を余儀なくされ、原敬を首相とする政党内閣が出現した。また米騒動は日比谷焼打ち事件（1905）以来の一連の民衆暴動の最後のものとなり、民衆の権利意識の高まりのもとに、労働運動、学生運動、普選運動、などの目的意識的、組織的な民衆運動が一斉に開花することとなった。

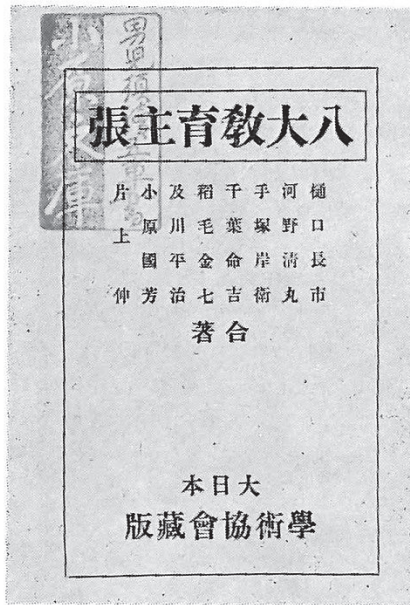
12・八大教育主張



片上 伸



小原國芳



大正10年8月，新教育運動の最高潮を示す「八大教育主張」講習会が東京高師で開かれ，翌年1月発行の本書は4月に8版を数え，その主張は燎原の火の如く全国の教育現場に広まった。



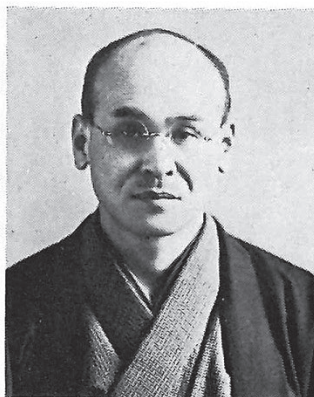
樋口長市



河野清丸



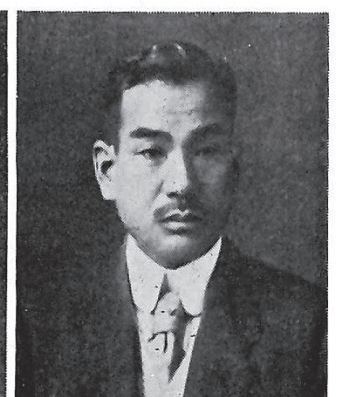
及川平治



稲毛金七



千葉命吉



手塚岸衛

『八大教育主張』表紙と8人の著者

(出典：小原國芳編『日本新教育百年史 第1巻 総説 (思想・人物)』玉川大学出版部、昭和45年刊)

1921 (大正10) 年の8月1日から8日までの8日間にわたって東京において大日本学術協会が「教育学術研究大会」を主催した。そこにおける8人の講師の主張を後に「八大教育主張」とよぶことになった。8人の講師とそれぞれの主張の題名とその特徴は次の通りである。(カッコの中は当時の職名と年齢)

①「自学教育論」樋口長市 (東京高等師範教授 50歳)

自主的学習を本位とする立場である。すなわち、明治期に見られた教師中心主義・注入主義に対して、彼は児童自

らの能力にもとづく自学的学習を教育方法の中心であると主張する。彼は従来の教師優位の教式・教順に対して、児童を主役とする学式・学順を説いた。そうして学習とは、児童の学習本能・学習衝動を発動させ、その上に立って児童自らが学習することによって自己を自覚し、自己を拡大し、自己を創造することであると考えていた。彼はモンテッソリーの影響を受けていたと言われている。

②「自動教育論」河野清丸（日本女子大学附属豊明小学校主事 48歳）

児童の自由な自発活動による文化の創造を強調し、外からの注入や伝授を戒め、文化の要素である真・善・美は、専ら先験的自我の作用である自動によって構成されると説き、教育の目的も方法も、自動を原理として立てられるべきであると主張した。河野の自動教育論は、超個人の我の実現、超個人の創造を理念とする文化の創造、そのような価値論を根底とする立場であった。教育の実際においては、モンテッソリーに学びながら、前述のような哲学においてその立場が構成されていた。

③「自由教育論」手塚岸衛（千葉県師範付属小学校主事 42歳）

「教育とは、人をその『現にある』の状態から、『あらねばならぬ』状態に引き揚げ、人として『あらねばならぬ』即ち人の理想的本分を充実せしむる働きである。そして理想は理性の所産であるとすれば、実に教育は自然の理性化と定義しうる」「人は一方自然的の存在者として自然の法則に支配せられ、他方には理想を実現する。・・・自然としてみれば人は動物や植物と等しく自然的因果の結果としての一所産であるにとどまるが、自由の方面より眺むれば、実に理想の実現者であり、己の行動の支配者である。・・・ここに人は人として有する特色と特権とがある。・・・教育の理想は自然の上に自由の王国を建設するにある」として、手塚は、自由を考える場合、理性的自由、人格的自由の立場に立ち、放任を許さず、創造と法則とを重視した。彼にあっては、理性による自然の支配こそは、真に文化の創造であり、また教育の信義でもあったのである。それゆえ、一種の理想的自由教育論とも言われている。

④「一切衝動皆満足論」千葉命吉（広島県市販付属小学校主事 34歳）

児童の自由を重んじ、自学・自動・創造を教育の重要な要素と見る自動中心の教育論である。ただし千葉の場合、高山樗牛の本能満足論に示唆を得たと言われるように、その教育論は、明らかに文芸的、耽美的であった。道德の問題について論ずる場合でも、善とは人間がその好むところを徹底するとき初めて真の善であると解され、児童をその好むがままに徹底することが教育の目的であり、また方法であると説いている。彼によれば、衝動には甲乙はない。如何なる衝動もその徹底が善であり、したがって、すべての衝動は徹底して満足させなければならない。しかしながら、満足させることは放任することではない。努力し、工夫した後の成果である。彼の教育論の原理的背景には日本神道の思想が背後にあったと言われる。

⑤「創造教育論」稲毛金七（雑誌『創造』主宰者 34歳）

理想主義的な自由教育論である。彼によれば、人生の目的は価値の創造であり、人間の本性もまた創造的である。教育は、その目的観においてもその方法観においても、創造を原理としなければならない。教育の直接の目的は、優れた個人格を創造することであり、究極の目的は、優れた文化価値を創造することである。そうしてその目的を達成するためには、その手段として、児童の創造性と創造力とを自律的に活動させなければならない。稲毛は「創造教育は教育者と非教育者とが文化現象の中において、広い意味で、自覚的に、即ち有目的、有意的、具案的、継続的に交渉し合う所の創造作用で、個人においても団体においても、厳密な意味の生活の動力であり第一段であるとする教育である」と要約している。

⑥「動的教育論」及川平治（明石女子師範学校付属小学校主事 46歳）

八大教育主張のうち、最も強くプラグマティズムの影響を受けていると言われる。

「学習とは今ここで私の要求を充たさんがために、その要求を充たす仕方、即ち、活動系統を自ら構成する過程である。・・・教育は教材を授けるという思想を捨て、そうして教材に到達するように子どもの経験を育てるという考



えを持たねばならない。・・・子供は知識を入れるところの袋でも容れ物でもない。ここにおいてこの活動を伝えるには、子供に活動させなくてはならない。・・・子供の過程を見ない内に教材を予定することの困難はここにある。今日において教材というものは、子供の補導にとって最後の標準である。」及川の分団式動的教育論は、その根底に「為すことによって学ぶ」という児童の自己活動性・可塑性に対する信頼があった。それ故に、教師が教材を伝達するという立場をとるのではなく、「教材に到達するよう児童の経験を育てる」という立場に立つのが、彼の教育論の中心であった。

⑦「全人教育論」小原國芳（成城小学校主事 34歳）

「全人教育」という言葉が、我が国ではじめて用いられたのがこの八大教育主張の講演である。全人教育とは、「教育の内容は人間文化の全部を盛り込まなければならぬ。故に、教育は絶対に『全人教育』でなければならぬ。全人教育とは完全人格即ち調和ある人格の意味です」と小原は述べている。「人間文化には六方面があると思います。すなわち、学問、道徳、芸術、宗教、身体、生活の六方面。学問の理想は真であり、道徳の理想は善であり、芸術の理想は美であり、宗教の理想は聖であり、身体の理想は健であり、生活の理想は富であります。教育の理想はすなわち、真、善、美、聖、健、富の六つの価値を創造することだと思います。然して真、善、美、聖の四価値を絶対価値と言ひ、健富の価値を手段価値と申します。」

⑧「文芸教育論」片上伸（早稲田大学教授 37歳）

片上の主張は、人間の道徳生活に対して、最も微妙な甚深なる根本的・永久的な感化力を有するものは、文芸であって、文芸教育こそはただちに道徳教育であるという立場である。彼によれば、現代教育の欠陥は、人間を総合的な生きた全体として扱わず、部分的・専門的・職業的に見ようとしているところにある。片上の立場は、文芸をもととする一つの全人教育であり、人間性の強い肯定、人間の生活と生命への信頼を豊かに含んだものであった。その具体性や教育方法において欠けているところ無しとは言えないけれども、当時、起きていた芸術教育運動の一翼をになうものとして、評価できる。

以上、この八大教育主張は大正期教育の花であった、といわれている。8人のうち、稲毛祖風を除き、何れも大学の教壇で、いわゆる教育学を講義した人びとではない。その何れもが教育現場の陣頭に立ち、理論上実践上の苦闘を敢えてした人びとである。教育上の大正デモクラシーは、まさに文部省（当時）や大学からでなく、明らかに教育の現場から燃え上がった焔であった。その意味で、上から恵み与えられたものではなく、下から期せずして湧き出た動勢であった。

13・木下竹次 \* i / 西村伊作 \* ii / 羽仁もと子 \* iii / 北沢種一 \* iv

\* i 木下竹次（きのした・たけじ 1872〔明治5〕 - 1946〔昭和21〕）

大正・昭和の教育改革運動の指導者。福井県勝山生まれ。奈良女子高等師範学校附属小学校主事として組織した「奈良の学習」はよく知られている。木下が明治政府の主導による画一的かつ形式的教育を批判し、子どもの生活に立脚した教育実践を開始したのは、富山県師範学校の附属小学校主事時代、すなわち1900年前後といわれるが、彼は子どもの生活と学校とが結合されるべきで、そうした教育によってはじめて子どもは自律的主体に育つと考えた。したがって、従前の教育学における「教授」「訓育」「養護」の3概念を一元的に統一して「学習」とし、自らの教育方法を「学習法」と名づけた。その理論と実践研究の成果は主著『学習原論』（1923）、『学習各論』（1926～29）などにまとめられている。

\* ii 西村伊作（にしむら・いさく 1884〔明治17〕 - 1963〔昭和38〕）

明治一昭和期の教育家。和歌山県生まれ。平民社運動に参加。明治45年大逆事件との関連で1ヶ月拘留。1912（大正10）年協力者と文化学院を創立、自由主義的教育を目指す。1943（昭和18）年不敬罪で起訴された。自伝『我

に益あり』1960（昭和35）年がある。

\*iii 羽仁もと子（はに・もとこ 1873〔明治6〕－1957〔昭和32〕）

大正・昭和期の女子教育者。青森県生まれ。旧姓は松岡。東京府立第一高女在学中に受洗。同校卒業後明治女学校に学びながら「女学雑誌」の編集に関わる。報知新聞社に入社、女性記者の先駆者となり明治34年同社の羽仁吉一と結婚。明治36年夫妻で「家庭の友」（「婦人之友」の前身）を創刊、生活の合理化を強調。1921（大正10）年自由学園を創設、キリスト教的自由主義による自労自治教育を実践。

\*iv 北沢種一（きたざわ・たねいち 1880〔明治13〕－1931〔昭和6〕）

大正・昭和期の新教育運動者の一人。特に労作教育・作業教育の提唱者として知られる。長野県師範学校を経て、東京高等師範学校英文科を卒業、福井県師範学校教諭、東京女子高等学校教授・附属小学校主事となる。以後1930年までその職にあって同校の教育に指導的役割を果たした。「作業教育」の名において実践を発展させ全国的にも注目された。労作教育の先駆者。著書に『作業教育序説』などがある。

### ③ 教育改革への始動

#### 14・臨時教育会議

「臨調」（正式には臨時教育会議という）

この「臨調」とは1917（大正6）9月21日勅令第152号臨時教育会議官制の公布により設置された教育政策を調査審議した合議機関である。この会議は、1917年（大正6）年10月第1回総会を開いて以降、1919年3月28日第30回総会によって実質審議を終えるまでの約1年半の間行われた。諮問は、小学校教育（第1号）、高等普通教育（第2号）、大学教育および専門教育（第3号）、以下、師範教育、視学制度、女子教育、実業教育、通俗教育、および学位制度などとなっており、当時の教育制度のほぼ全領域に及んでいた。特に当時の「学制改革問題」の焦点となっていた（旧制）高等学校制度（第2号）と大学制度（第3号）の審議に最も重点がおこなわれた。従来大学予科を本体としていた高等学校を、中学校に相当する尋常科4年と高等科3年とを一貫させた七年制の高等普通教育機関と性格づけた。

臨時教育会議は内閣総理大臣の監督に属し教育に関する重要な事項を調査審議する機関で、総理大臣の諮問に応じて意見を開申し、また総理大臣に対して建議することの出来る機関として設置されることと定められた。この会議の使命と任務について、たとえば寺内総理大臣は、「この学制改革は第一次世界大戦後における情勢を戦後経営ますます多難であるとして、この際教育を振興して難局に対処しなければならない」と述べて、国家有用の人材を養成することを主とすると演説している。

#### 15・七年制高等学校

上述の臨時教育会議の設置において学校制度の改革が論議された。その中で、高等学校については、それぞれ従来はまったく大学予備的存在であったものを「高等普通教育ヲ授クル所」と規定しただけで実質的には変更を加えず、中学4年修了者の入学を認め、さらに七年制高等学校の設置を認めることによって、知的エリート of 早期選抜を可能にしようとした。大正7年12月6日高等学校令が公布され、従来大学予科科であった高等学校を男子の高等普通教育を完成する学校であるとして、予科の性格を除いて完成教育を施す学校に改めた。

#### 16・大学令

臨時教育会議での高等教育機関の改革についての答申に基づいて、大正8年より新しい制度の下における大学

制度を発足させ、概ね答申の如く大学を成立させた。わが国の大学は、この臨時教育会議の答申によって著しい改革を受けたといえる。大正5年には帝国大学5校のみが大学として存立し、約9千人の学生をもっていたが、大学令実施後、昭和5年には46校の大学が成立し、学生数は7万人に近い数となった。こうした大学の増加は、全く新しい大学令の公布によって見られたものであって、大学についての考え方を根本から改めさせるに十分な改革がなされたと見ることができる。

#### ④ 沢柳政太郎の活躍

17・沢柳政太郎（さわやなぎ・まさたろう 1865〔慶応元〕－1927〔昭和2〕）



沢柳政太郎（出典：小原國芳編『日本新教育百年史 第1巻 総説（思想・人物）』玉川大学出版部、昭和45年刊）

明治後期の文部官僚。講壇教育学を批判して実証的教育学を提唱した教育学者。大正期には新教育運動の指導者として、また国際教育家として活躍した。1916年帝国教育会会長となり、教師自身の向上発展と教職の地位向上のために尽くす。1917（大正7）年成城小学校を創設、1923年日本国際教育協会会長、1926年大正大学初代学長。

沢柳の著『実際的教育学』（1909）は、「実際と没交渉」である従来の教育学の空漠性を提唱しており、わが国の実践的科学的教育学研究の系譜における記念すべき著作となった。成城小学校は「児童天賦の性情能力」を遺憾なく発揮させることを目指す新教育運動の拠点校であると同時に、教育学建設のための実験学校として構想された。「発達」の観点を重視する沢柳は、「教科の始期」の研究を中心に仮説演繹法による教育実験を目指した。1922（大正11）年実験に着手したドルトン・プランは全国的な注目を浴びた。

『沢柳政太郎全集』全11巻、国土社 1975～1980年 がある。

#### ⑤ 成城小学校のころ

18・斉藤勇\* i・斉藤光\* ii

\* i 斉藤勇（さいとう・たけし 1887〔明治20〕－1982〔昭和57〕）

大正・昭和期の英文学者。福島県生まれ。東大教授、のち東京女子大学教授。文学史の研究においてその背景となるイギリス国民性および各時代思潮を重視し、まだ研究法の定まらなかったわが国の学界にイギリスの

A.C. ブラドレーや W.P. ケアの重厚・精密な学風を移植した。英詩の研究を中心に『ミルトン』『英詩概論』『シェイクスピア研究』『ブラウニング研究』『イギリス文学史』など数多くの著書・論文・随筆がある。

\* ii 齊藤光（さいとう・ひかる 1915〔大正4〕 - 2010〔平成22〕）

昭和期のアメリカ文学者。精神史・文化史的視点から「アメリカ・ルネサンス」文学研究に新しい方向を示した。父は齊藤勇である。

19・小原國芳（おばら・くによし 1887〔明治20〕 - 1977〔昭和52〕）



大正9年頃 成城小学校で修身の授業する小原國芳

（出典：小原國芳編『日本新教育百年史 第1巻 総説（思想・人物）』玉川大学出版部、昭和45年刊）

新教育運動の指導者。成城学園の発展に寄与し、玉川学園を創設した。1915年に京都帝国大学に入学。その後、母校広島高等師範の付属小学校主事を経て1919（大正8）年に成城小学校校長であった沢柳政太郎の要請を受けて同校の主事として赴任、「教育問題研究会」を組織するなど成城学園を日本の教育改造運動のメッカともいふべき学園に発展させる上で中心的役割を果たした。1921（大正10）年の夏、東京で開催されたいわゆる「八大教育主張講演会」で（注12）で取り上げた「全人教育」を主張した。

## ⑥ 父兄も参画した理想学校づくり

20・平塚雷鳥 \* i ・加藤武雄 \* ii ・中河與一 \* iii

\* i 平塚雷鳥（ひらつか・らいてう 1886〔明治19〕 - 1971〔昭和46〕）

大正・昭和期の社会運動家。東京生まれ。本名は奥村明（はる）。明治44年婦人文芸誌「青踏」（せいとう）を発刊、創刊の辞「元始女性は太陽であった」は女性の解放宣言として反響を呼び、「青踏」は婦人問題誌へと発展した。大正4年「青踏」を伊藤野枝に譲る。大正7、8年にかけて与謝野晶子らと母性保護論争を行う。女性の労働問題、参政権獲得への提言など、その後の様々な活動は、「青踏」を土台として発展した。戦後は平和運動にかかわり、反戦・平和の婦人運動の先頭にたった。昭和28年日本婦人団体連合会会長になった。

\* ii 加藤武雄（かとう・たけお 1888〔明治21〕 - 1956〔昭和31〕）

大正・昭和期の小説家。神奈川県生まれ。高等小学校卒。小学校の準教員を努め、投稿家として文名を得る。

明治44年新潮社に入社、「文章倶楽部（くらぶ）」などを編集。農村を描いた短編集『郷愁』（大正8）で作家として認められた。『久遠の像』（大正8－大正12）以後、通俗小説、少女小説に転じた。

\*iii 中河與一（与一）（なかがわ・よいち 1897〔明治30〕－1994〔平成6〕）

大正・昭和期の小説家。香川県生まれ。早大英文科中退。1924（大正13）年川端康成らと「文芸時代」を創刊、新感覚の旗手として『刺繍せられた野菜』（大正13）、『氷る舞踏場』（大正14）などを発表。評論集『形式主義芸術論』（昭和5）を刊行。のち偶然文学論を提唱。『愛恋無限』（昭和10-11）で第一回北村透谷文学賞受賞。代表作『天の夕顔』（昭和13）は戦時下にベストセラーとなった。

## 21・小林宗作（こばやし・そうさく 1893〔明治26〕－1963〔昭和38〕）

群馬県出身。小学校を卒業すると、すぐに代用教員となり、検定試験で教員の免許をとる。その後、上京。牛込小学校の先生となるかたわら、音楽の勉強をし、東京音楽学校（現東京藝術大学）の師範科に入学、卒業後、成蹊小学校の音楽教師になる。この時、明星学苑の創立者兄玉九十先生の同僚となる。この成蹊小学校で、小林は生徒のために、子どものためのオペレッタをつくった。大正12年、小林が30歳のとき、留学する。

世界中に大きな影響を与えたダルクローズのパリの学校で直接ダルクローズから学び帰国。帰るとすぐに、小林の幼児教育に全面的に共鳴した小原國芳と成城幼稚園を創る。その後、昭和12年、トモエ幼稚園、トモエ学園（小学校）を創立する。小林宗作は、黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』で取り上げられている。

## 22・ドルトン・プラン

ドルトン・プランは日本でも、以下のようなドルトン・プランとして成城学園で行われた。ドルトン・プランとは、1920年、アメリカのマサチューセッツ州ドルトン町の中学校でヘレン・パークストによって始められた教育方式である。彼女はそれまでの教師としての体験の中で「知識の詰め込みよりも真の人間としての教育、賦課の教育よりも、自己体験のいわゆる『生活としての教育』の大切なこと」を痛感した。そこで教育に生気を与え、児童に学習興味を起こさせ、これを保持する生ける教育を目指して「教育的実験室」で学習させるプランを開発した。これは、これまでの児童の能力・個性・興味などを無視した学級における一斉授業、試験の成績だけで及第を決する方式に変えて、教室を1つの実験室とみなし、自学自習を建前とし、児童生徒は必要に応じて教師の指導を受け、自ら実験観察をして結論に到達しようというものである。その後彼女はニューヨークに移って「児童大学」という私立小学校を設立し、自ら開発しドルトン・プランの実践につとめた。

## ⑦ 新教育実践の先駆け

### 23・梁田貞（やなだ・ただし 1885〔明治18〕－1959〔昭和34〕）

大正・昭和期の作曲家。音楽教育家。北海道生まれ。「どんぐりころころ」など数多くの名曲を作曲。ベツォルト、ウェルクマイスターらに師事。歌曲『昼の夢』（明治44）、『城ヶ島の雨』（大正2）を発表して成功。大正4年から『大正幼年唱歌』を出版。唱歌、童謡などを作曲。母校東京音楽学校などで教育活動にも従事。

### 24・正宗得三郎（まさむね・とくさぶろう 1879〔明治12〕－1962〔昭和37〕）

明治～昭和期の洋画家。富岡鉄斎研究家としても有名。岡山県生まれ。正宗白鳥の弟。東京美術学校卒。明治42年文展に初入選。大正3～5（1914～16）年滞欧、マティスを訪ねる。大正4年二科会会員。大正10年再渡欧。大正13年帰国し二科展に「モレー運河」などの滞欧作品を出品。昭和22年二紀会を結成。

## 25・斎田喬（さいだ・たかし 1895〔明治28〕－1976〔昭和51〕）

大正・昭和期の児童劇作家。香川県丸亀生まれ。地元の小学校教員ののち、大正9（1920）年私立成城小学校の小原國芳に招かれて上京。翌年の第一回成城学校劇研究会に作品を発表、以降学校劇運動の中心となる。戦後は児童劇作家協会（現日本児童演劇協会）を創立。児童劇集『蝶になる』（昭和6）などがある。

### おわりに

以下、この解題の結びとして、「大正デモクラシーと新教育」の対談を読んだ個人の感想を述べて、「おわりに」に代えたいと思います。

大正期に活躍した思想家・哲学者・作家・音楽家など多くの文化人がこの大正期の精神・大正新教育の精神を実質的につくり出したこと、その精神を両先生は実体験されていたことが大変羨ましく思いました。

大正デモクラシーが花開いて大正新教育を産んだ時代、そこから教育界も自由に「教育とは何か」を反省し、「教育の本質とは何か」を独自に考え、色々な教育者・指導者がそれぞれ競って独創的・建設的・実践的な教育思想を打ち出すことが出来たのだと思います。八大教育主張はそのよき例になるといえます。その背景に大正デモクラシーが教育における新教育思潮を後押しして大正新教育が花開いたと感じました。両先生がこの大正期の新気運のなかで児童期・少年期・青年期を過ごされて沢山の著名な先生方や当時の文化人から直接学ばれたことは大変幸せなことだったとの思いを深くしました。私にとって、直接大学院生時代から教えを受けた児玉三夫先生に関して言えば、この大正期の新教育を一身に受けられて学校生活を送られたことがその後のペスタロッチ研究者になられた大きな動機になっていたのではないか、と確信できた対談でありました。

### 主な参考文献一覧

- ・ 中野光著『大正自由教育の研究』黎明書房 昭和43年刊
  - ・ 海後宗臣編『臨時教育会議の研究』東大出版会 1960年刊
  - ・ 『新教育学大事典』全8巻 第一法規 平成2年刊
  - ・ 『八大教育主張』玉川大学出版部 昭和51年刊（尼子止編『八大教育主張』大日本学術協会発行を校訂・復刻したもの）
  - ・ 小原國芳編『日本新教育百年史 第1巻 総説（思想・人物）』玉川大学出版部 昭和45年刊
  - ・ 『日本大百科全書』小学館 昭和61年刊
  - ・ 芳賀登他監修『日本女性人名辞典』日本図書センター 1993年刊
  - ・ 三好行雄他編『日本現代文学大事典 人名・事項編』明治書院 1994年刊
  - ・ 『現代日本人名大事典』平凡社 1979年刊
- 他『新潮日本文学辞典』／『日本近代文学大事典』／『日本人名大事典』／『教育人名辞典』など。

### （おことわり）

1. 解題するに当たっては、本文に脚注を入れてあります。たとえば、注1を\*1とし、そして、注の中の小見出しに関しては\*1としてあります。

例・国の臨調・・・1とし、西田幾多郎・・・\*iとしてあります。

2. 解題の文中、西暦と邦暦を併記しています。但し、幾つかの箇所ではどちらか一方のみを記しているところもあります。